

吉屋信子『空の彼方へ』における〈久遠の女性〉

木下 響子

はじめに

『空の彼方へ』は、デビュー作である『地の果まで』^①『海の極みまで』^②につづく初期三部作の完結編であり、はじめて雑誌『主婦之友』(昭和二年四月〜昭和三年四月)に連載した小説である。『空の彼方へ』の発表後、円本ブームの影響で得た資金^④により、吉屋は約一年間の洋行をし、帰国してからは『主婦之友』に継続して作品を掲載するほか、新聞や雑誌に多くの連載を抱える人気作家となった。

『空の彼方へ』を書いた時期、吉屋は『花物語』^③の成功によって、すでに少女小説の分野では一定の評価を得ていた。しかし、吉屋は、『空の彼方へ』を執筆しながら、より多くの大衆に読まれる〈通俗小説〉を書いてゆくことを決心していた。つまり、

『空の彼方へ』には吉屋が〈通俗小説〉で最も表現しなかったものが描かれているといえる。吉屋は初期三部作を通じて、女性の精神性の高さを表現しようとしてきたと考えられるが、吉屋はその完結編となる『空の彼方へ』において、〈久遠の女性〉という言葉でそれをあらわしたのである。

本稿では、〈久遠の女性〉という言葉を通して、『空の彼方へ』でどのように女性の精神性の高さが表現され、三部作の完結編とされたのかを明らかにしたい。

尚、本文の引用は初出の『主婦之友』掲載のものに従う。

一 『空の彼方へ』の位置づけ

『空の彼方へ』は、何度も収録されており、二度も映画化さ

れていること(6)から、吉屋の長篇小説の中でも人気があった作品だということ(7)がうかがえる。吉屋は、この『空の彼方へ』を『地の果まで』および『海の極みまで』と同じように新聞に掲載する希望があったことは、結果的には叶えられなかったにせよ、『空の彼方へ』が新聞小説の体裁をとっていることから明らかである。また、『地の果まで』と『海の極みまで』に続く三部作の完結編であることは、本文の終末部からわかる。

——見よ人々、空には星、地には祈る子、奏づる曲は、マリアの讃えの歌ぞ。その音いみしくも響き行くであらうよ！地の果まで、海の極みまで、空の彼方へ！——

(傍線は論者による、以下同)

『空の彼方へ』については、『主婦之友』編集長である石川武美の評(『主婦之友』昭和二年二月号「編集日誌」一月八日)がある。石川は、「女史が嘗て大阪朝日紙上で発表した『地の果まで』、『海の極みまで』と共に三部作をなすもので、しかも前二作よりも、芸術的で、興味的の長篇小説である。」としており、『空の彼方へ』が三部作の完結編であることも、ここで指摘されている。

『地の果まで』は大正九年一月から『大阪朝日新聞』に連載され、『海の極みまで』は『東京朝日新聞』および『大阪朝日新聞』に大正十年七月から連載されている。このように、前二作品が連続して執筆および連載されているのに対し、『空の彼方へ』の創作ノート(8)は前作から三年後の大正十三年三月から七月にかけて作られ、発表はさらに三年後の昭和二年四月からである。つまり、『空の彼方へ』は計六年間という歳月をかけて作られた作品なのである。創作ノートは二冊のノートブックに縦書きで書かれ、二冊目の表紙には、物語の終末と同じ文句「地の果まで海の極みまで空の彼方へ！」と書き込まれていることから、当初から三部作の完結編として創作したことがわかる。異同としては、『主婦之友』の連載の草稿とほぼ同じだが、連載時には冒頭の第一回が削除されている。

『空の彼方へ』を創作しはじめた時期について、吉屋は後に、『空の彼方へ』について(9)で、次のように述べている。

婦人雑誌には、まだこれという長篇小説を発表する機会が恵まれず、少々悶々の形でした。何処からも頼まれたわけでもないのに、私はせっせと『空の彼方へ』という長篇を書き出して、六百枚余のものを、書き上げたのですが、さあ、

それを載せる舞台が欲しい、それで私は、思い切って、主婦之友社長、石川武美氏に、自己推薦の手紙を書いて、原稿を小包で送ってしまったのです。

昭和五十年に発刊された『吉屋信子全集』に付されている「年譜」^⑩においても、「新聞連載小説を二回書き、文壇の知人も増えたものの、格別それで大人の小説の依頼がくるわけでもなく（中略）兄の家の二階にいささかくすぶっていた」と書かれている。大正十四年、吉屋は交蘭社より個人雑誌である『黒薔薇』^⑪を一月から八月まで一ヶ月に一卷のペースで発刊した。発刊に際して、吉屋は第一号の「御挨拶」^⑫の中で「今の商業主義の雑誌の弊害から逃れて、自由に清らかに力強く自己の芸術を育て抜いてゆく！」とした。内容としては、口絵、長編小説「或る愚かしき者の話」、短編、読者からの寄稿として「鸚鵡塔」が毎回あり、それに加え、感想という文壇批評や、随筆などがある。しかし、八号の「巻尾」^⑬で「作者は一寸憩ひが欲しくなりました」として休刊した。このように、吉屋はこの時期、作家としての方向性を模索していた。そのような中で、吉屋は、『空の彼方へ』を書くことで、方向性を定めたことが次の手紙から分かる。吉屋が門馬千代にあてた手紙（大正十四

年二月九日付^⑭）から伺える。

いよいよ決心しました。自分のかいてゆ（く）仕事の本路を一つきめてまっしぐらに行きたいのです。それは所謂通俗小説とある人々の呼ぶもの、言い代へれば民衆に贈る長篇創作です。私はそれによつて出来るだけ美しいもの正しいものをあざやかに描いてゆきたい。（中略）私はかく心をさだめました。空の彼方までを記念す可き発心のスタートにしていよく本気で仕事をしてゆきます。

『空の彼方へ』に関する先行研究は、論文としては、藤田篤子氏によるものがある^⑮。藤田氏は、吉屋の初期の長編小説を概観し、『空の彼方へ』は全体の形としては、よくまとまった作品であり、この時期の吉屋の長篇小説のスタイルとして完成されたものである^⑯。として、初期の集大成が『空の彼方へ』であると位置づけた。また、日本近代文学会二〇一七年度春季大会において、芳賀祥子氏が「女性雑誌における創作欄がつむぐ女同士の絆の可能性——『主婦之友』の連載小説と読者欄をめぐって」という論題で、雑誌『主婦之友』と吉屋の関係について『空の彼方へ』を中心に発表を行っている。

以上のように、『空の彼方へ』は作者である吉屋自身の言動からも、その後の研究からも、初期の重要な作品であるといえる。それでは、連載当時、『空の彼方へ』はどのように読者に受容されていたのだろうか。

二 女性読者の『空の彼方へ』の受容―女性の尊厳

『空の彼方へ』が連載された時期、『主婦之友』誌上では、連載小説の末尾に「読者の声」欄を設けていた。ここでは、『主婦之友』に掲載された「読者の声」から、『空の彼方へ』がどのように受容されていたかを明らかにしたい。

まずは、主人公初子が恋人の茂に、貞操を捧げるように強要され、それを拒絶する場面である。

「君は馬鹿だね。僕をいつまで童貞だと思つてゐるの。僕はもうそんな子供ぢやあないよ。(中略)

「いけません、いけません。私に触つてはいや、汚らひしいッ、どいてください。帰ってください。」(中略)

「え、そのまゝのあなただつたら、私永久にお会いしたくはございません——私、私、あの——あなたの卑しい

快樂の玩具になるのは私の魂が許してくれませんもの……」(中略) 処女としてなすべきことは守り得た。恋しい人を目の前にして、よくも強くなり得た。正しく女性の守るべき道義を曲げはしなかつた—— (恋愛篇 霊の日蝕)

この描写に対しての読者の反響(『主婦之友』昭和二年七月号「空の彼方へ」「読者の声」欄)で、読者は、「初子こそ、私達女性の、本当の姿です。」と、初子を女性の代表とした上で、「現代の男性は、私達女性を、もう少し、高く評価する必要があるあります。甘い言葉で、女性の誰もが、一切を許すものだといふ男性の横暴さ、卑劣さを、私は憎まずにはをられません。」と男性を批判する。そして、「女性は、真の愛の前には、一切を捧げこそすれ、気まぐれな、肉欲の奴隷の甘言には、決して欺かれるものでないことを、尊い誌上をかりて申したいのでございます。」と続けて主張する。また、他の読者は、「初子さん、あなたはどんなにお辛かつたでせうね。」と初子に直接語りかける。彼女は続けて、「よく愛する人の誘惑を斥けて、尊い処女性を、守つていただきました。でも私は、あなたの悲しいく、気持ちがよく解りますわ。」と初子に共感する。

つぎに、茂が初子の妹である仲子との関係を、仲子が処女で

ないことを理由に破棄しようとし、初子がそれを糾弾する場面である。

「初子さん、あなたはまだ何も知らないんだ。仲ちゃん
はね、僕に下関で会ふ以前に、もう立派に処女の純潔を失
つてゐた人なんですよ。(中略)

傲慢にもならぬ責任感を振り廻して茂は語気を強めた。

初子はそのとき、涙を払つて立ち上がった。

「茂さん、あなたは処女でない女性には、男は何をして
もいゝとおつしやるのですの？」

その瞳も眉も冴えて凜々しかつた。

「……」

茂はぐ、わんと頭を打たれる思ひだつた。

(恋愛篇 破れし夢)

読者の反応(『主婦之友』昭和二年十月号「空の彼方へ」「読
者の声」欄)では、本文で、初子が茂に対して述べる「茂さん、
あなたは処女でない女性には、男は何をしていゝとおつしや
るのですの?」という言葉に対し「なんといふ立派なお言葉
でせう。」と感嘆している。また、ある読者は「初子様の正し

い健全な御精神は、本当に私達処女の典型でございます。」と、
初子を「処女の典型」とし、「妹のために、かくまでも犠牲と
なつてくださる初子様のお心、実に実に嬉しく存じます。」と
初子の犠牲的精神を「健全」なものとして賞賛する。

初子の犠牲を賞賛し、読者自身の「典型」とする声は、他に
も見る事ができる。それは、「愛する者を肉親の妹にゆづる
切ない初子さんの心：仲子さんは本当にいゝ、お姉さんを持つて
幸福ですわ。気高い初子さんに幸多かれと祈ります。」という
声や「内にあつては優しい姉、けれども一歩外に出ては、どこ
までもしつかりした態度の初子様、私はたゞく感服の外はあ
りません。これでこそ私共女性の典型だらうと存じます。」と
いう声に見られる。

ここで、雑誌『主婦之友』の読者層に触れておく必要がある
だろう。先に引用した「読者の声」のなかに「私達処女」と述
べている声があつたように、『主婦之友』は「主婦」を掲げて
はいるが、その読者層は「主婦」に限定されていたわけではな
い。「校長先生も処女会員に『月刊雑誌を買ふなら、『主婦之友』
を買ひなさい』とおつしやいます」(『主婦之友』昭和二年三月
号「誌上倶楽部」とあるように、基本的には、女学校からも
『主婦之友』の購読は奨励されていた。木村涼子氏は『主婦

の誕生―婦人雑誌と女性たちの近代⁽¹⁷⁾』の中で『主婦之友』の読者層の属性を集計している。その結果として、「既婚者も多いが、未婚女性も相当数みられる。学歴が明記されているものを拾い上げると、高等女学校の卒業生がめだつ」としている。このような読者達の中には、吉屋の以前のファンも多く存在していたことが、「私は十七歳の乙女でございます。(中略)私は先生の『三つの花』も拝見して、先生を心から崇拜してをります⁽¹⁸⁾」と過去の著作を挙げていることや、「おなつかしい吉屋先生⁽¹⁹⁾」といった呼びかけから推察できる。

このような読者たちは、茂の強要をはねのける初子の姿に自らを重ねている。そして、そこに女性としての尊厳を見出してゐる。初子は、読者の女性にとつては、女性の尊厳を表にあらわすことができる、強い意志を持った憧れの女性なのである。そして、妹の仲子の幸福のために、自身の恋愛を犠牲にする初子を賞賛しているのである。

三 〈久遠の女性〉とは何か

さて、以上のように読者に受容されていた初子であるが、彼女は小説内において〈久遠の女性〉とされている。ここでは、『空

の彼方へ』が発表された当時の〈久遠の女性〉とはどのような女性として認識されていたかを明らかにしたい。まずは本文をみていきたい。

物語の序盤、茂から初子への告白の手紙の中で、「あなたは運命が僕に与へた、たつた一人の『久遠の女性』です。」と茂は綴る。次に、物語の終末部で、初子が昇天していく様子が描かれるなかでの、茂の内面描写である。

茂はこのとき(久遠の女性は人類を引き上げ救う)と言いしゲートの言葉を知った。聖母マリアの意義は、この人類至上善の美しき力を生む、久遠の女性の象徴であつたのか――
(復活篇 空の彼方へ)

このように、本文では二回「久遠の女性」という言葉が現れるが、その言葉は常に初子を指している。

引用部の「(久遠の女性は人類を引き上げ救う)と言いしゲートの言葉」という箇所から、〈久遠の女性〉とはゲートの言葉によるものと本文で明示されている。これは、ゲートの『ファウスト』の末章である。厨川白村の『近代の恋愛観』(大正十一年六月 改造社)に次のようにある。

「ゲエテは『ファウスト』の末章に「久遠の女性われらを導く」と歌ひ、ダンテの『神曲』に於てはベアトリチエこそ救ひの女神であつた。

厨川白村の『近代の恋愛観』は、当時のベストセラーである。吉屋信子が、個人雑誌『黒薔薇』の一号で掲載した「純潔の意義に就きて厨川白村氏の恋愛観を駁す」²⁰で、『近代の恋愛観』を批評していることから、吉屋が『近代の恋愛観』を読んでいたことがわかる。

さて、『近代の恋愛観』において厨川白村は「久遠の女性われらを導く」としているが、当時の『ファウスト』の訳はどうなっているのだろうか。森鷗外による訳では、「永遠に女性なるもの／我等を曳きて往かしむ」（『ファウスト』第二部 大正二年三月 富山房）と訳されており、「久遠の女性」という言葉は使われていない。管見したかぎり、「久遠の女性」に近い言葉で訳されている当時の翻訳は「久遠女性といふもの、／われらを引きて行く」（村上静人訳編『ゲエテ傑作集』大正六年 佐藤出版部）であった。この部分の訳について、昭和二十八年に岩波書店から出版された『ファウスト』²¹の注で、訳者の相良

守峯は次のように述べている。

聖母マリアや、塵の世を離れて清められたグレートヘンなどの女性によって代表される神的な永遠の愛を意味する。このような、女性において現れている没我的な永遠なる愛が男性を救うという思想はゲーテが生涯もちづづけたのである。なおこの語の原語 Das Ewig-Weibliche のエーヴィヒは副詞でなく形容詞として解すべきだと思つるので、「永遠に女性なるもの」とせずに「永遠なる女性」と訳しておいた。いずれにせよ、日本語では表現しにくい言葉である。

『ファウスト』の翻訳ではないが、姉崎正治は、「久遠の女性——女性に対する仏教と基督教——」²²においてこの部分の訳と意味を（久遠の女性）としている。

此の如き、「理想の婦人」即ち「婦人の理想」を称して茲にドイツ詩人の言葉を用ひて「久遠の女性」(Das ewige Weibliche)といふのである。即ち一人一人の生滅の婦人に普く通じて、その生命活動の根柢をなしてをる婦人の特性或いは理想といふ意味である。

以上から、〈久遠の女性〉という言葉は、ゲーテの『ファウスト』の最後の合唱部分、Das Ewig-Weibliche の訳からあらわれ、次の言葉に「導く」や「引きて行く」などがあることから、周囲を救済する存在であることがわかる。

『ファウスト』における〈久遠の女性〉は、ヘレーネとする説⁽²³⁾と、マルガレーテとする説⁽²⁴⁾があるが、どちらにしろ、ファウストの恋人であることに違いはない。また、厨川白村は、『近代の恋愛観』のなかで、「かの欧州中世の浪漫的な詩的恋愛観が、羅馬教会の宗教信仰と結び付き、ゲエテが所謂『久遠の女性』となり、ダンテが地上の恋人ベアトリチエを、救いの女神と見た⁽²⁵⁾」として、『ファウスト』と並べてダンテの『神曲』におけるベアトリチエを挙げているが、ベアトリチエもダンテにとっての恋愛対象である。

日本の近代文学における〈久遠の女性〉の用例としては、夏目漱石が『吾輩は猫である』において、恋人（結婚相手）の意味として「久遠の女性」という言葉をつかっている⁽²⁶⁾。さらに、大正十三年に、菊池寛の小説『新珠』における女性像を語る座談会⁽²⁷⁾で、岡本かの子と菊池寛が次のように会話している。

岡本(かの子) 私、菊池さんの理想にする人は外にあつて、あの小説にはないと思ひます。女性でも菊池さんの久遠の女性といふのは此の外にある、それはいつか外にお書きになるものに現されるかしれません。

菊池 小説に自分の理想の女性なんかかきませんよ。

ここでは、はっきりと「久遠の女性＝理想の女性」として定義されている。

〈久遠の女性〉と信仰との関連も見逃すことは出来ない。相良氏も前掲書の注で聖母マリアとの関連を指摘している。また、本文でも「聖母マリアの意義」として「久遠の女性」があげられている姉崎正治は「久遠の女性——女性に対する仏教と基督教⁽²⁸⁾」の中で、観音と聖母マリアが同じように「久遠の女性」としてみられるようになったと述べている。

下つて明治画会の大天才狩野芳崖のコンセプションには、観音は母としての大慈愛の表象となつて、かの大作を出だし、仏教の観音は殆どキリスト教の聖母と同じ点まで発達した。仏教及びキリスト教の中に「久遠の女性」の理想が生じ来つて、主として之を母としての理想に止めたのは宗

教の自然の需要である。

姉崎が狩野芳崖を引き合いに出しているように、芸術分野において、〈久遠の女性〉は、観音としてみられていた。それは、村上華岳が『画論』（弘文堂 昭和十六年二月）において、「久遠の女性」という項を設けて「人間には押へても押へ切れない美に対する憧憬がある。これを象徴したものが『久遠の女性』であると思ふ。」と述べ、「あらゆる美と善を具へて完全なる体相を示してゐる観音はかういふ意味から見ても、人間の理想と憧憬を形に表はしたものであつて、中性ではあるが『久遠の女性』の一つとも見ることが出来るのではないか。」としていることから伺える。

作者である吉屋信子自身も、自身の信仰との関係で、聖母マリアと観音を「理想」と「久遠の女性」と考えていたことが、昭和六年の『主婦之友』の記事から伺える。

その後、私はクリスチャンとしてのいろんな教育を受けましたので、マリア様を理想の女性として、深い愛慕の心を寄せていました。

ところが、あるとき、長崎にまわりましたとき、知合ひの

お方から、薩摩焼の観音像をいただきましたが、そのお顔といひ、そのお姿といひ、如何にも愛に充ちた、和やかな感じがいたしました、この観世音菩薩こそ、私共東洋婦人の理想とすべき、久遠の女性であると思ひまして、それ以来、観音様を信仰するようになりました。（『主婦之友』昭和六年一月号「幸運百パーセントの私の信ずる守護神」）

このように、〈久遠の女性〉とは、ゲーテの『ファウスト』における Das ewige Weibliche の訳語としてあらわれてきた。そして、それは理想の女性、女性の理想、女性の性質の美しさ、の意味で使われてきた。また、〈久遠の女性〉の愛によって男性（および人類）が救われるという考えも見る事ができ、あるいは、単に恋人という意味をみることもできる。そして、それは近代日本においては、キリスト教における聖母マリアであり、仏教における観音だったのである。

四 『空の彼方へ』における初子―〈久遠の女性〉として

それでは、本文において初子はどのような〈久遠の女性〉として描かれているかを明らかにしていきたい。まずは、茂から

の告白の手紙における描写である。

あなたは運命が僕に与へた、たつた一人の「久遠の女性」です。(中略) この上はたゞ、あなたの美しい人格の投影に依つて、僕自身をより高く引き上げて頂き、より強く、より豊に自分を育んで、将来必ずあなたの伴侶の男性として許され得る者になりたい。(恋愛篇 相寄る魂)

このように、初子はその高い精神性によつて、茂をも高い精神性をもつ人物へと引き上げる存在として見られている。実際に、仲子との関係を解消しようとした茂は、初子の一言によつて恥じ入り「この上は、僕はかくも気高いあなたを生涯の義姉上として仰ぐつ、ましい幸福に感謝」し、「善き良人になり切つてゆきますと、永久に錆びず朽ちぬ黄金の誓ひを立て」る。しかし、仲子との結婚後、日々の生活の中で茂は、仲子に対して冷たい仕打ちを繰り返すようになる。だが、関東大震災の報を聞き、初子の「清げに賢く優しくしその佛」を思い浮かべたことにより、茂の心には「此頃の荒みゆく生活の底に、忘れ沈んでゐた初子との永遠の誓ひ」が蘇り、善良さを取り戻す。このように、過ちを犯した茂が、初子の存在によつて、その過

ちを自覚し、高潔な人物への正しい道へ導かれていくのである。これは、まさに初子が『ファウスト』における〈久遠の女性〉と同じ存在として見られていると言える。

そして、終末部では、アヴェ・マリアの音楽と共に、「久遠の女性」＝「聖母マリア」＝初子として描かれる。

美しくも虔ましく、いみじき調べの音の前に、地に立ちてそこに聴き入る茂はこのとき(久遠の女性は人類を引き上げ救う)と言ひしゲーテの言葉を知つた。聖母マリアの意義は、この人類至上善の美しき力を生む、久遠の女性の象徴であつたのか――深い強い感動が彼の全身を打つた――彼は凜然として空を仰いだ。

「初子さん！」(復活篇 空の彼方へ)

『空の彼方へ』は、茂が初子の影響によつて成長する物語でもあるといえる。

物語において、茂は何度も過ちを犯す。過ちといつても、処女でないことを理由に婚約を解消しようとする、または、妻となつた仲子を顧みないなどという行動は、当時の男性からすれば常識の範囲内であるが、女性にとつては当然、忌避されるべ

き行動である。茂が〈通俗的な男性〉としての振る舞いをするたび、初子の存在が茂を「引き上げ」るのである。茂にとって初子は、愛の対象であると同時に、茂を善良で高潔な人物へ導く存在である。そして、茂はそのような初子を〈久遠の女性〉とみなしている。

茂にとって、初子は精神的に高い存在であり、その存在により、茂を精神的に成長させる〈久遠の女性〉であったが、茂は最終部において、聖母マリアの意義が久遠の女性の象徴であるとしている。それはまた、当時の言説においても、〈久遠の女性〉が聖母マリアとしてもみられていたことと関連するだろう。

木村涼子氏は、近代の女性にとって婦人雑誌が果たした役割をジェンダー論やメディア論などを基に明らかにした〔『主婦』の誕生―婦人雑誌と女性たちの近代〕²⁹ 第四章の「主婦のファンタジー〈慰安の章〉」で、〈通俗小説〉の物語構造を明らかにし、〔空の彼方へ〕について次のように言及している。

すべての世俗的な欲望が達成不可能な場合、「聖なるハッピーエンド」がヒロインを救う。「聖なるハッピーエンド」とは、欲望の鎮魂がヒロインの「死」によって実現される仕掛けを指す。（中略）

運命に翻弄されるままにロマンティック・ラブを断念するヒロインたちは、一様に「神」に近づく。（中略）〔空の彼方へ〕の初子は、「聖母マリア」に模して語られる。

このように、木村氏は婦人雑誌に連載された〈通俗小説〉の物語構造における、結末のパターンとして、「聖なるハッピーエンド」の典型的な形の一つが、吉屋の『空の彼方へ』の主人公初子であるとしている。

それでは次に、初子が聖母マリアとして具体的に、作品内でどのように描かれているかをみていきたい。

物語の冒頭で末子が初子に「私上手になつたら真先にアヴェ・マリアの曲を奏けるようにするつもり。だつてお姉様の一番好きな曲ですもの。私ほかの曲よりも、それが一番上手になりたいの。」と述べるように、アヴェ・マリアの音楽によって初子は、その登場時から聖母マリアに仮託される。初子の死が確定する場面においては、「これはお姉様が亡くなつた母さんのご遺品だからと肌身離さず首飾りにして身に付けていらつたのですもの、これがこの灰の中からでたのは——もう」とマリア像のメタルが初子の遺品となる。そして、終末部では、「初子さん！／＼その名を杓かに空に呼べば、仰ぐ彼方に夕星一つ

：燦として聖母の瞳の如く——しかもその光に紛ふて、地にも一つの星に似しは末子の項に懸けられし、姉の肌を離さざりし銀のメタルの聖母の像の頸飾——」と、茂によつて語られ、完全に初子＝聖母マリアとして描かれるのである。

初子は、処女であるが、その存在は「母」でもある。

「茂に取つては、初子は彼のため心の母であり、唯一の自分の思想上の理解者であつた。」と本文にあるように、茂にとつて、初子は母のような存在である。初子もまた、過ちを犯した茂に対して「浄めの母」や「アウガスチンの母」などの言葉を自らに使用し、母性愛でもつて、茂を正しい道へと引き戻そうと考へている。

また、初子は妹二人の庇護者として、「私は——妹たちを愛して守つてやりたい者なのです」と述べ、「自分の幸福も仕合せも犠牲にしなければならぬ立場」であるとして、自らの幸福を犠牲にしてもその責務を全うしようとしている。実際、初子は仲子のために、茂との関係を破棄し、末子を助けるために震災で亡くなるのである。そのような母性的な存在である初子は、震災で亡くなった後、教え子達による追悼会では、歌でもつて送られるのだが、ここでも、「われらのみ母」や「導き給ふ」など、初子が母的な存在で、導き手であることが強調さ

れている。これらから、初子が、処女でありながらキリストを産んだ聖母マリアと同じ設定であることは言うまでもない。

初子の母は、身体が弱く、初子を庇護する立場としては描かれていない。家長として家を守っているのは初子であり、むしろ彼女は初子の庇護下にある。母親が没し、遺品の銀のメタルの聖母の像の首飾りを身につけるようになると、初子のマリアとしての仮託はさらに強くなってゆく。そして、物語の終末部では、完全に「聖母マリア＝初子」として描かれるのである。

初子は、自身の幸福を犠牲にしても、仲子、末子を母のごとく守り、庇護する存在である。茂にとっては、母のような慈愛を注いでくれる恋愛の対象であると同時に、「久遠の女性」として、精神的に高く引き上げてくれる女性である。そして、茂は初子を、終末部において「聖母マリア＝久遠の女性」として認識するのである。

おわりに

吉屋信子の『空の彼方へ』は、吉屋の初期の作品における一つの到達点であり、通俗小説を書いていくことを決めた転機となる作品でもあった。

主人公の初子は、当時の女性読者たちにとって女性の尊厳を毅然と表すことができる、「女性の典型」として支持された。

物語において、初子は〈久遠の女性〉としてみなされる。〈久遠の女性〉はゲーテの『ファウスト』の Das ewig-Weibliche という単語の訳としてあらわれ、愛によって男性を精神的に引き上げる理想の女性とされた。また、宗教としての〈久遠の女性〉は、キリスト教においては聖母マリア、仏教においては観世音菩薩としてみなされる存在であった。

主人公初子は、妹達にとつては自身の犠牲をいとわず庇護してくれる母のような存在である。茂にとつては恋人であり、破局してからも、高い精神性により茂を高潔な人物へと導いてくれる存在でもある。

吉屋にとつての〈久遠の女性〉とは、自身を犠牲にして周囲の幸福に尽くす女性である。吉屋は「憧れし作家の人々」⁽³⁰⁾の中で木下尚江の『良人の自白』について言及し、次のように述べている。

ことにみごもりて自刃する美しい薄幸の夫人は私の胸中に今でも最初の(久遠の女性)の幻像として残されてあります。

また吉屋は戦後、「久遠の女性」という題の新聞記事⁽³¹⁾を書いているが、そこでも、自らの犠牲を厭わない老婆の姿を紹介し「日本の(久遠の女性)は、あいにく若くも美しくもない、おいたるシワのよった素朴な教養も高からぬこうしたお婆さんに見いだされる」としている。吉屋にとつて、小説における最初の〈久遠の女性〉とは、『空の彼方へ』の初子であった。初子は、女性にとつては、自身を犠牲にしても周囲の幸福に尽くす、女性の高い精神性の表象として賛美される存在であり、一方、男性にとつては、その高い精神性により、人間として正しい道へと導く存在である。

デビュー作である『地の果まで』の主人公、春藤緑は周囲を幸福に導くことはできず、死によって幸福へ導いたのは緑の姉であった。続く『海の極みまで』では、主人公の環は修道院へ入るため、自身の平安は得られたが、周囲は救われなかった。吉屋は、三部作の完結編として、『空の彼方へ』において、初子の死によって周囲を幸福へ導き、女性の精神性の高さを〈久遠の女性〉というキーワードで示したのである。

〔注〕

(1) 『大阪朝日新聞』の懸賞小説の二等当選した小説であり、

同紙に大正九年一月一日から六月三日まで連載。

(2) 『東京朝日新聞』および『大阪朝日新聞』に大正十年七月十日から十二月三十一日まで連載。

(3) 吉屋は『空の彼方へ』ではじめて『主婦之友』に連載し、その後も多くの連載を続け、昭和十二年からは専属作家となった。

(4) 新潮社の『現代長篇小説全集』十八巻のなかに『吉屋信子集』（昭和四年三月）が入ったことによる印税（二万円）。これを使い、大陸を横断して欧州を訪れ、パリに半年滞在した後、アメリカに渡り、帰国した。

(5) 『花物語』は大正五年から十三年まで断続的に『少女画報』で連載され、大正十四年七月から大正十五年三月にかけて『少女倶楽部』に掲載された。

(6) 昭和三年松竹蒲田で葛見丈夫監督によって映画化され、さらに昭和十四年に日活多摩川で吉村廉ほかによって映画化された。

(7) 『主婦之友』の掲載時には、平均四話ずつほどがまとめで連載され、恋愛篇、受難篇、復活篇の三編構成で、さらに小見出しが各話についている。

(8) 『空の彼方へ』の創作ノートおよび草稿は神奈川近代文

学館所蔵。

(9) 吉屋信子「あとがき」「空の彼方へ」について『吉屋信子全集』三巻 昭和十年四月 新潮社月報「書斎より（その四）」

(10) 吉屋信子『吉屋信子全集』十二巻 昭和五十年六月 朝日新聞社

(11) 吉屋信子「黒薔薇」一号 交蘭社 大正十四年一月

(12) 吉屋信子「黒薔薇」八号 交蘭社 大正十四年八月

(13) 『生誕110年 吉屋信子展―女たちをめぐる物語』図録 神奈川近代文学館 平成十八年四月

(14) 藤田篤子「空の彼方へ」続く道―吉屋信子初期長篇小説概論』『愛知論叢』平成二五年八月

(15) 吉屋信子「空の彼方へ」「読者の声」欄『主婦之友』昭和二年十一月号

(16) 吉屋信子「空の彼方へ」「読者の声」欄『主婦之友』昭和二年十二月号

(17) 木村涼子「〈主婦〉の誕生―婦人雑誌と女性たちの近代」平成二十二年 吉川弘文館

(18) 吉屋信子「空の彼方へ」「読者の声」欄『主婦之友』昭和二年五月号

(19) 吉屋信子「空の彼方へ」「読者の声」欄『主婦之友』昭和二年九月号

(20) 吉屋信子『黒薔薇』一号 大正十四年一月 交蘭社

(21) 相良守峯訳『ファウスト』岩波書店 昭和二十八年三月

(22) 姉崎正治「久遠の女性——女性に対する仏教と基督教——」明治三十七年「太陽」、後『已弁集』（大東出版社 昭和九年十二月）所収

(23) 林久男は『ゲーテの面影』（岩波書店 昭和三年五月）において、「グレーチヘンとの恋に於て煉獄の試みを経たファウストは、理想の女性ヘレーネに対する恋に於て天堂に至るべき道を教へられた」としている

(24) 高橋健二は『ゲーテと女性』（郁文堂書店 昭和二十三年十月）において、「マルガレーテがファウストの魂を引きあげる」としている

(25) 厨川白村『近代の恋愛観』改造社 大正十一年六月

(26) 夏目漱石『吾輩は猫である』上巻（大倉書店 明治三十八年十月）第三章

「向かふ横丁の鼻がさつき押しかけて来たんだよ、こゝへ、実に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙弥君」「うむ」と主人

は寝ながら茶を飲む。「鼻つて誰のことです」「君の親愛なる久遠の女性のご母堂様だ」「へえ」「金田の妻といふ女が君の事を聞きに来たよ」と主人が真面目に説明してやる。

(27) 中村武羅夫 芥川龍之介 久米正雄 菊池寛 岡本一平 宮田修 三輪田正道 九条武子 厨川蝶子 三宅やすこ 田和歌子 岡本かの子 都河龍 太田菊子「新珠」を通して見た三処女の行き方——『婦女界批判会——』『婦女界』大正十三年十一月

(28) 注二十一に同じ

(29) 注十六に同じ

(30) 吉屋信子「憧れし作家の人々」『作家の自伝66 吉屋信子』監修佐伯彰一・松本健一 日本図書センター 平成十年四月

(31) 吉屋信子「久遠の女性」『朝日新聞』朝刊 昭和二十五年九月十三日

〔付記〕本稿は関西大学国文学会（平成二十九年七月十五日 於関西大学）における口頭発表に基づく。席上、ご教示を賜った諸氏に御礼申し上げます。

（きのした きょうこ／本学大学院生）